

## 母子相互作用の確立に関する研究

1. 新生児期早期母子分離のその後の母子相互作用の確立－帝王切開児－
2. 幼児の気質に関する研究

(分担研究：相互作用と乳幼児の心理行動発達に関する基礎的研究)

前川喜平\*、副田敦裕\*、横井茂夫\*、遠藤かほる\*

要約： 母子相互作用によるアタッチメントの成立には新生児早期の母子の接触以外に多くの因子が考えられる。新生児期早期に母子接触が不能であった母が、その後、発達の過程において、どこがこととなり、それがどのように修正されるか、或はされないかを多面的に解析するため本研究をおこなった。本年は第1段階として帝王切開出生の母子について正常児（早期接触群）と対比して母子の行動様式の相異を研究した。未だ研究途上で膨大な資料の解析が終わっていないが、1カ月健診時では母親の児に声をかける行動と診察の介助をする行動に出現の差がみられた。外来での観察によると、その差は発達と共に消失していくようである。

母子相互の児側の因子として児の気質があり、これについて我々は長年研究をおこなっている。今回は我々が作成した幼児用行動様式質問紙を使用して3才児の気質タイプとアンケートによる母親の児に対する印象との相関を調査した。その結果、気質タイプ別の比較では easy child と slow to warm up child との間には同様の傾向がみられたが、difficult child と easy child では違いが認められた。今回の調査では、行動様式質問紙から求められた児の気質のタイプは母親がどのように子供を捉えているかといった一面をみるのに役立つように思われた。

見出し語： 早期母子非接触、母子相互作用、帝王切開、幼児の気質

1. 新生児期早期母子分離のその後の母子相互作用の確立－帝王切開児－

前川喜平、副田敦裕、遠藤かほる

研究目的： 我々は新生児早期の母子接触がその後の母子関係、アタッチメントの成立に重要であることを否定しないが、約20年間、重症新生児室に入院した児の発達 follow up をおこなっているが、脳障害児は多々みられるが、battered child や mother depriving 症候群になった児は経験していない。私の経験から欧米と我国

では必ずしも同一でないものがあると考えられる。母子相互、アタッチメントの成立には新生児期早期の接触以外に多くの因子が考えられる。

我々は新生児期早期に母子接触が不能であった母が、その後の発達の過程においてどこがこととなり、それがどのように修正されるか、或はされないかの過程を多面的に解析するため本研究をおこなった。

今回は第1段階として帝王切開児についておこなった。未だ研究が未終了で膨大なデータの解

\* 東京慈恵会医科大学小児科 (Dept. of Pediatrics  
The Jikei Univ. School of Medicine)

析をおこなってないので、その一部を報告する。

**研究方法：** 早期接触の定義には議論のあるところですが、今回は、まず実際の状況でよく見られるような早期の母子分離の例として、帝王切開によって出産したお母さんとその児について検討しました。ですから、対象は、分娩方法によって帝切群と正常群に分類される満期産で健常な児とその母親で、経験の要因を排除するために初産、第一子としました。方法の概略を説明いたします。ここに計画の概要をあげておきました。(表1) 本研究は妊娠後期から出産後1年までの縦断研究で、6つの時期にそれぞれ決められた手続きを実施します。まずSCTと示されているのは、都立母子保健院の川井ひさし先生と庄司順一先生が創案された文章完成の検査で、母親の心理状態を理解する助けとして用いました。この検査は妊娠期から児の発達段階に沿っていくつかの検査刺激が用意されておりますが、ここでは、妊娠後期、出産後1週間以内、6カ月目の3回、お母さんに施行します。在院中に実施される接触時間の記録とブラゼルトン・スケールは主に統制上の理由から行い、以降、通常健康診断に来院する毎に、検診中の母親の行動を10秒ごとの観察で記録、そして授乳場面をビデオで撮影しました。

現在、最初の被験者がようやく3カ月を過ぎたところなので、詳しい結果は報告できませんが、今のところ、母親の年齢、在胎週数、出生時体重に群差は見られません。当院では、普通分娩の場合、出産後、産湯につかる前にお母さんに抱いてもらっています。帝切の場合には、腰椎麻酔、全身麻酔との両方の場合があり、腰椎麻酔では生れた直後、看護婦さんが抱いて見せますが、全身麻酔の場合は目覚めて、病棟へ帰る時に初めて児と面会することになります。在院期間は、正常群は

約1週間、帝切群は約2週間となっています。

最初の授乳は、正常群では出産の翌日、約20時間後、帝切群では3日目、約70時間後に行われます。

**研究結果：** 生後7日間の接触時間の合計、ここで言う接触時間とはお母さんがこどもと触れ合っていた時間をあらわしますが、正常群は平均25時間11分(SD=9時間19分)であったのに対し帝切群では平均17時間30分(SD=5時間7分)でした。

図1は1カ月検診時の行動観察の結果を簡単にまとめたものです。単純なカイ検定では、両群に1%水準で有意差がみられました。どの項目間で差があるのか、統計的にはまだ検討しておりませんが、児に声をかける行動と診察の介助をする行動の出現に差がありそうな結果となっております。

その他の資料の分析はまだなので、これ以上のことは言えませんが、生後1カ月の時点では、正常群と比較して、帝切群の母親の行動には違いがあると思われます。その違いがどんなもので、いつまで存続するのか、これからのデータの収集と分析によって検討していきたいと考えております。

**考察：** その後の臨床的観察によると1カ月児にみられた帝切児と正常児の母性行動の差は発達と共に消失していくようである。

来年度は帝切児以外に満期SFD、早産児などで早期接触が不能であった乳児について同様の調査をもおこなう予定である。

表 1 計 画 の 概 要

1. 妊娠後期	SCT - PKS (妊婦用文章完成法)
2. 出産～退院	母子接触時間の記録、SCT-NKS (新生児期用)、ブラゼルトンの新生児行動評価
3. 1カ月	診察時の行動観察、授乳場面の観察、クラウドスらが行ったインタビュー
4. 3カ月	診察時の行動観察、授乳場面の観察
5. 6カ月	診察時の行動観察、授乳場面の観察、SCT-IKS (乳児期用)
6. 12カ月	診察時の行動観察

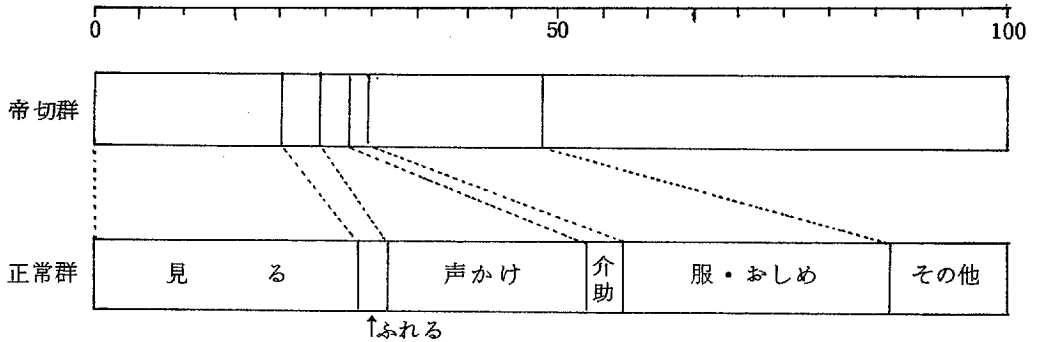


図1 1カ月検診時の母親の行動出現率 (%)

## 2. 幼児の気質に関する研究

前川喜平、横井茂夫、副田教裕

**研究経過及び目的並びに方法：** 私たちはこれまで、児がどのようにするかといった、児の気質・行動様式を知ることは、良好な母子関係を形成する上で重要なことと考え、Thomas や Carey らの研究に基づき、行動様式質問紙を用いて研究を行ってきました。今回は1-3歳児用行動様式質問紙を用いて、3歳児を対象とした各カテゴリースコアの標準値及び気質のタイプによる違いを報告してきました。図2は前回報告したのですが、正産期産児で仮死などを認めない正常な3歳児737名より求めた標準値です。

私達は Carey の定義にしたがい、気質のタイプによる分類を行いました。(表2)今回は、これらの気質のタイプによる分類と、母親へのアンケートにより求められた日常生活で見られる児の行動や母親の児に対する印象などとの比較を行い、児の持つ気質との関連について検討してみました。

**研究結果：** まず児の身体症状と育児との関連について検討してみました。児の不定愁訴としての頭痛や腹痛、あるいは車酔いなどが多くみられる児との比較をおこないました。(図3)

この比較では difficult child にこれらの不定愁訴を認める児が多くみられました。

次に睡眠との関連についてしてみました。添い寝せずに1人で寝る習慣のある児は easy child

に多くみられ、(図4)またぬいぐるみや、枕、タオル等を持って寝る習慣のある児は、difficult child に多く、(図5)また夜間に寝ぼけたりして何度か目覚めるなど、睡眠パターンに問題の見られる児は、difficult child に多くみられました。(図6)これらの睡眠習慣との関連では easy child と difficult child との間で 1% の危険率で有意差を認めました。

また1週間に1回以上の夜尿が3歳の時点でみられる児は、5%の危険率で difficult child がやや多い傾向がみられました。(図7)

図8は母親に育児上での印象を聞き、これと気質のタイプとの比較を行ったものです。育児が予想したより楽であると答えた母親は、easy child をやや多く持つ傾向が見られ、児を育てにくい、取扱が難しいとした母親は difficult child を持つ傾向が見られました。これらの質問では easy child と difficult child との間で 1% の危険率で有意差を認めました。また、母親から見て、児に反抗が強く見られるとされる児は、1%の危険率で difficult child に多く認められました。

**考察：** 今回は、母親のアンケートより求められた児の行動や児に対する印象と、行動様式質問紙より求められた気質のタイプとの関連について報

告してきました。今回の気質のタイプ別による比較では、easy child と slow-to-warm-up child との間には、同様の傾向がみられましたが、difficult child と easy child との間では違いが認められました。

また今回の調査では、アンケートからの結果で、

母親が児をよく受け入れていないといった傾向の見られる場合において、difficult child が多い傾向があるようにも思われ、行動様式質問紙から求められた気質のタイプは、母親がどのように子供を捉えているかといった一面を見るのにも、役立つように思われました。

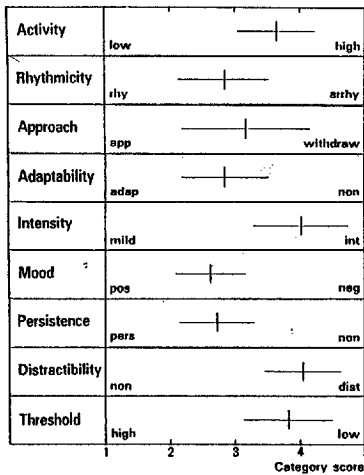


図2 カテゴリー・スコアの標準値：3歳児 (n=737)

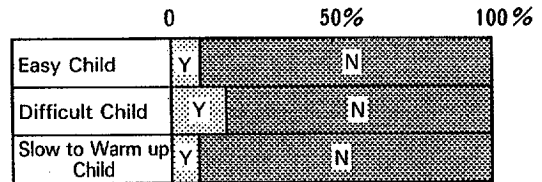


図3 頭やおなかをよく痛がる車酔いをしやすい (Yes, No)

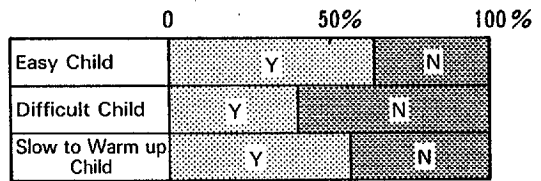


図4 添い寝せずに1人で寝ますか (Yes, No)

表2 気質的特徴のタイプ別による分類

	正常児 (Japanese) n=737	Carey's n=309
Easy Child	41.1% (n=303)	37.9% (n=117)
Difficult Child	13.3% (n=98)	12.3% (n=38)
Slow-to-Warm-up Child	7.5% (n=55)	6.2% (n=19)

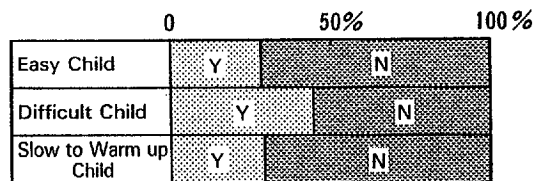


図5 愛玩物(ぬいぐるみ, まくらなど)を持って眠りますか (Yes, No)

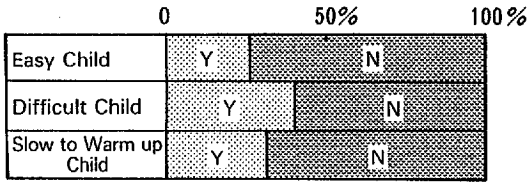


図6 夜間、とび起きたり、寝ぼけたりする。  
眠りが浅く、夜何度も目覚める  
(Yes, No)

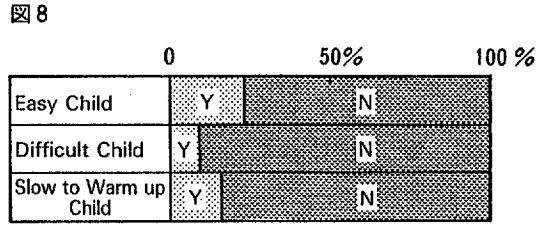


図8 育児は予想したより楽ですか  
(Yes, No)

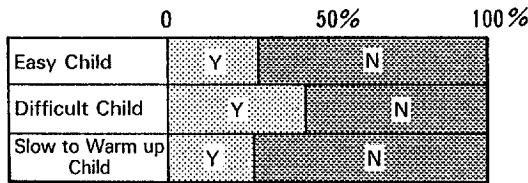
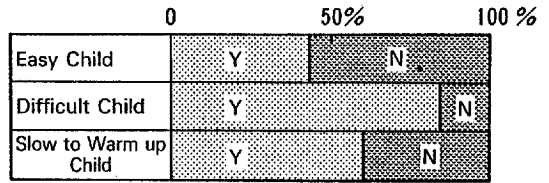
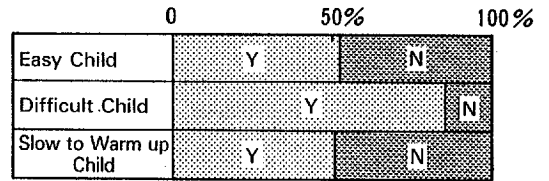


図7 夜尿が1週間に1回以上みられる  
(Yes, No)



育てにくい、取り扱いがむずかしいと  
おもうことがある (Yes, No)



親のいうことをきかず反抗することが  
よくある (Yes, No)

### Abstract

Studies on establishment of maternal infant bonding in mothers of cesarian section — early separation for their babies

Kihei Maekawa, Atsuhiro Soeda, Kaoru Endo

#### Purpose:

Early post-partum contact of mother and infant is thought to be important for a mother to establish good maternal-infant bonding. But there are many facts that mothers who can not contact with her baby in early neonatal period come out later to be very good maternal behaviour to her infant. And so, our hypothesis is that early contact is not only the way to make maternal-infant bonding; there are so many factors to be influenced process of establishing maternal-infant bonding. The purpose of our studies is to investigate how the maternal-infant bonding is established on the process of child development in the mother who have to separate from her

baby after birth for short period.

#### Materials and Method:

Two groups of primiparous mothers were studied. The two groups were nearly identical with respect of mean age, social, economic and marital status. The cesarian section group comprised those who had the separation from their babies for first few days. The control group comprised those who had the early contact with their babies. The mothers were given SCT-PKS test at late pregnancy. At the maternity ward, mothers made their record of actual contact time with their babies and was given SCT-NKS test. Every newborn was assessed with Brazelton NBAS at 5 or 6 days. The mothers behaviours were observed at one, three, six and twelve months of age. Each time, mothers behaviours were analysed by observation and video recording during physical examination and feeding at one, three and six months. And at six months, SCT-NKS questionnaire was given to mothers.

#### Results:

Our studies are still going on, and so only part of our results are reported;

##### 1) Contact time

Average contact times of the cesarian group and the control group were 17 hours and half hours, and 25 hours and 11 minutes respectively.

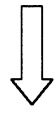
##### 2) Mothers behaviour at one month

Behavioural differences of the two group mothers were observed at one month visit. The mother of the control group showed much more soothing their infants in response to crying and the babies physical examination. We are taking further investigation how these behavioural differences will be going on, to catch up or to remain the same at later age.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:母子相互作用によるアタッチメントの成立には新生児早期の母子の接触以外に多くの因子が考えられる。新生児期早期に母子接触が不能であった母子が、その後、発達の過程において、どこがことなり、それがどのように修正されるか、或はされないかを多面的に解析するため本研究をおこなった。本年は第1段階として帝王切開出生の母子について正常児(早期接触群)と対比して母子の行動様式の相異を研究した。未だ研究途上で膨大な資料の解析が終わっていないが、1ヵ月健診時では母親の児に声をかける行動と診察の介助をする行動に出現の差がみられた。外来での観察によると、その差は発達と共に消失していくようである。

母子相互の児側の因子として児の気質があり、これについて我々は長年研究をおこなっている。今回は我々が作成した幼児用行動様式質問紙を使用して3才児の気質タイプとアンケートによる母親の児に対する印象との相関を調査した。その結果、気質タイプ別の比較ではeasy childとslow to warm up childの間には同様の傾向がみられたが、difficult childとeasy childでは違いが認められた。今回の調査では、行動様式質問紙から求められた児の気質のタイプは母親がどのように子供を捉えているかといった一面をみるのに役立つように思われた。